

〔書評〕

川崎佐知子校訂

『御茶湯之記』 予楽院近衛家熙の茶会記』

本 多 潤 子

川崎佐知子氏が校訂し、熊倉功夫氏、筒井紘一氏、そして名和修氏の三氏が監修した本書は、公益財団法人陽明文庫が所蔵する『御茶湯之記』全十一冊（資料番号〈九四〇九六〉―〈九四一〇六〉）の全本本文の翻刻に加え、詳細な注釈・解説・関連年譜、そして索引を有した書である。副題に、「予楽院近衛家熙の茶会記」とあるように、本書に収録された『御茶湯之記』は、五撰家筆頭の近衛家の第二十一代当主であり、摂政・関白・太政大臣を歴任した、予楽院近衛家熙（一六六七―一七三六）が亭主をつとめた茶会の会記集である。茶会毎に開催期日と客人・（場所）・道具・献立が記されている。正徳三（一七一三）年八月から享保二十一（一七三六）年正月にかけて、家熙四十一歳から七十歳、既に摂政を辞していた時期に開催された、実に三百八会の茶会の記録である。詩歌・書道・絵画・香道・茶道に有職故実等々諸道について卓抜した才能を持つ、一流の文化人であった家熙の晩年の偉業

が、本書の翻刻と注解によって、つぶさに伝えられている。

なお、本書は思文閣出版より昭和四十九（一九七四）年から刊行されている、茶湯古典叢書の第六巻目にあたる。茶湯古典叢書はこれまでに、『茶道四祖伝書』、『古田織部茶書』、『金森宗和茶書』、『茶譜』、『片桐石州茶書』がいずれも権威ある研究者陣によって執筆、刊行されている。本書はこれらの茶書のなかで、公家の茶道を代表する典籍として位置付けられるであろう。

この度の『御茶湯之記』出版の意義を考える上で欠かせない書が、『槐記』である。家熙の文化的な造詣の深さは、近衛家の侍医、山科道安（一六七七―一七四六）が筆記した家熙の言行録、『槐記』によって広く知られている。『槐記』は享保九（一七二四）年正月から同二十（一七三五）年正月までの記録であり、『御茶湯之記』の記録時期に完全に含まれる。そのため、家熙が主催し、山科道安が臨席した茶会に関してには特に、同一の茶会の

同時代資料として必見である。なお、『槐記』に記載された家熙の「御会席」は、山科道安が臨席した八十七会の茶会を中心とした記録であり、そのうち家熙が亭主として主催した茶会の記録に限定すると、約三十三会である。『御茶湯之記』の網羅的な性格が、より実感されよう。

なお、『槐記』は、茶道の基本的文献として古くから著名であり、淡交社『茶道古典全集』全十二巻（第十五代千宗室総監修、一九五六年—一九六二年）のうち、第六巻（昭和三十三年（一九五八）年刊）に収録されている。茶道古典全集では、校訂者である柴田實氏が、陽明文庫に所蔵されている家熙の自会記の手控えの存在を指摘し、解題に附して、「槐記校訂に當つて是非これも参照したいと考えたのであったが、（中略）ついにその意を遂げえなかった」と記している。家熙の自会記は、『槐記』研究において古くからその存在が知られ、研究の必要性が説かれていたのである。

その後の研究史の詳細をここで触れることはしないが、この『御茶湯之記』は、淡交社より昭和四十八（一九七三）年に刊行された『豫楽院公茶約筆筭 陽明文庫蔵』（解説 芳賀幸四郎氏、高原杓庵氏、水谷川忠磨氏）の付録として部分翻刻が、名和修氏作成の「豫楽院自会記」のなかに収録された。残念ながらこの貴重な書物は千部限定の出版であり、広く一般に流通することはなかった。近年においても『御茶湯之記』の注目度は増すばかりであった。緑川明憲氏の著書『豫楽院鑑 近衛家熙公年譜』（勉誠

出版、二〇一二年）において、陽明文庫所蔵の『雑事日記』等と並んで頻用されている。このように、この度、本書が茶湯古典叢書として収録されたことは、まさに待望の刊行であったのである。

そして本書には、充実した注解が付随する。翻刻下部の脚注には、客人の略歴、花や料理の語注、道具の由緒・伝来等が細かに記されている。さらに、他資料に同一茶会の記事がある場合は補注にその本文が引用されている。補注には、前述の『槐記』の他、陽明文庫所蔵の『雑事日記』、『御道具目録』、『家熙公記』、家熙の両親の記録である『基熙公記』、『无上法院殿御日記』、家熙の嫡子の『家久公記』等の記事が引かれている。同時代資料の引用は、まさに網羅的であり、夫々の資料の記述で補完しあうことでさらに茶会の実態が浮かび上がっていく様は、実に圧巻である。

また、個々の茶道具に関して、家熙以後の伝来も追跡されているものも多い。先行研究の提示も細やかであり、美術史の研究資料としても充実した内容となっている。この補注に、大正七年六月、東京美術倶楽部にて開催された、近衛家の売立の目録、『近衛公爵御蔵器第老回入札目録』、『大正七年六月十日近衛公爵御蔵器第式回入札目録』が用いられていることも、本書の特色の一つであろう。名和修氏は、本書の「はじめに」において、近衛家伝来の茶道具の多くがこの大正期に売却されたことを惜しみつつ、売立目録掲載の写真の優品の「殆どがこの茶会記の道具立に登場

するもの」であることを指摘し、その資料的価値に言及されている。

さらに、本書には解説として、川崎氏と監修者三氏による多彩な四論が付されている。まず、名和修氏が「近衛家熙について」と題して家熙の生涯を綴る。『御茶湯之記』成立に至った家熙をとりまく環境、社会的背景がここに確認できる。さらに、茶の湯以外の文化的素養、絵画・書道といった多岐にわたる業績を伝える。

次に熊倉功夫氏が、「御茶湯之記」にみる懐石」と題して、会記からみえる十八世紀の日本の食文化について論じる。具体的には、享保九（一七二四）年十月二十三日の茶会の懐石を取り上げ、例えば、「しべとはいえ鶴が供された点に前撰政太政大臣という格が示されている」とする。このように、堂上公卿の最高位に位した家熙の茶会に見られる特徴をつぶさに指摘するが、食材の産地の多様さもその特徴の一つであるという。また、懐石道具に関しても、清朝の色絵磁器などの最新の異国趣味、また同時代の尾形乾山（一六六三—一七四三）の食器の多用など、最新の流行を敏感に取り入れているさまをみわたし、「予楽院の茶の湯が清新の気に富み、時として趣向に富むものであった」と指摘されている。

続き、筒井絃二氏は、「近衛家熙の茶会」を三章立てで論じる。

「一 近衛家の茶の湯」では、家熙の祖父、尚嗣（一六二二—一六五三）の茶の湯の特色について、そして家熙の茶の湯に多大な

影響を与えた常修院宮（梶井宮慈胤親王）や獅子吼院宮（妙法院宮克恕親王）等との交流について述べ、家熙の茶の湯の基盤を明らかにする。「二 予楽院茶会の客」は、『御茶湯之記』で最も多く、四十八会招かれている久田宗也（一六八一—一七四四）の記録を紐解くことから始まる。家熙が亭主をつとめた際の客の顔ぶれから、茶会の目的を見通す内容となっている。「三 女性の茶道」では、家熙の茶会に女性が招かれているのは二十回ほどであり、それは親族の女性に限られていることを指摘する。特に家熙の女で、女性ながらに亭主も務めた記録のある、入江御所尊融尼の存在を深く掘り下げている。このように、具体的な人物を例に、茶会の開催意図を解き明かすその手法は、茶会記の資料的価値を伝えるに余りあるものである。

最後に、川崎佐知子氏が「御茶湯之記」の書誌および関連資料」を記す。『御茶湯之記』の書誌や特色を示し、さらに関連資料として、本書の注に多く引用された、山科道安『槐記』、近衛家の諸大夫、進藤長之（一六六五—一七二七）の他会記『他所之茶事道具献立之留』、近衛家の家礼、錦小路頼庸（一六六七—一七三五）の日記『錦小路頼庸朝臣記』、近衛家諸大夫の家政記録『雑事日記』等に関して解説を付している。川崎氏は、「致仕後の家熙の茶湯は、『御茶湯之記』をもとに、参会者による会記をはじめとした同時代資料をも考慮に入れることで、ほぼ完全に近い形で再現できるように思われる」としている。本書刊行の意義についても、「御茶湯之記」は、家熙の茶湯に関する基本資料とみ

なすべきことをあらためて提唱したのである」との氏の言に集約されるであろう。

解説に続いて、本書には『御茶湯之記』関連年譜も収録されている。そこには正徳元（一七一）年から元文元（一七三六）年にかけての、「近衛家の動向および家司・家礼等に関する事項」「皇室・将軍家に関する事項」が細かに編年体で記されている。

さらに本書の特筆すべき点は、その詳細な索引にある。「客人篇」「道具篇」「献立篇」に分けられ、さらに「道具篇」は、「掛物」「釜」「香合」「茶人」「茶約」「水指」「花入」「茶碗」「香炉」「その他（風炉）」「炭籠・炭取（水次）」「蓋置」（棚・休台・台）」「卓」（その他）」「花」に、「献立篇」も、「料理」「菓子」「器物（椀）」「重箱」「盆」「膳」「皿」（鉢）（その他）」に分類されている。索引を眺めるだけで、各々の分類の中で、どの品が類用されていたかがうかがえ、家熙の好みを考える上で興味深い。さらながら家熙時代の近衛家の茶道具の目録を手に行っているかのような思いにとらわれる。

以上の本文に加え、本書には口絵として、陽明文庫の名品がカラーで載っている。『御茶湯之記』冊子、「近衛家熙画像」の他、茶会に用いられた記録のある後西天皇御作の茶約など、家熙遺愛の品三十一本を有する「茶約筆筒」、菓子器として使われていた「白磁無地金欄手馬上盃 金球瑯」、本席の掛物として多用されており、家熙好みの表装でも有名な重要美術品「藤原定家筆詠草 泊瀬山」、香宮として二度ほど家熙の茶会に使われていた記録の

ある重要美術品「蒔絵伽羅箱 物かは」、後西院より家熙に贈られた砧青磁の傑作である重要文化財「青磁鳳凰耳花生 銘千声」といった、『御茶湯之記』に登場する宝物の写真画像が載せられている。これらの宝物は、二〇〇八年東京国立博物館『宮廷のみやび―近衛家一〇〇〇年の名宝展』、二〇一四年九州国立博物館『近衛家の国宝 京都・陽明文庫展』等の展観に度々出陳されており、実際に拝見したことがある諸氏も多いであろう。本書によって現存する宝物と会記を照らし合わせて、家熙の取り合わせ、茶会の趣向に思いをはせることが可能となっているのである。

また、茶道具はその来歴を重んじる。前出の大正七年六月、東京美術倶楽部『近衛公爵御蔵器第壹回入札目録』、『大正七年六月十日近衛公爵御蔵器第貳回入札目録』には多くの茶道具がその名を連ねていた。記載された近衛家伝来の宝物には、予楽院の箱書や書付が付随するものが多数確認される。このような入札などを経て、現在、陽明文庫以外にも家熙遺愛の宝物が多く所蔵されているが、家熙の箱書がある場合、さらに外箱を作成し、その箱書きを大切に保管している品もまた多い。家熙の存在が、現在の茶道史、美術史においても重要な位置を占めていることが、改めて強く感ぜられる。

以上から、本書はまさに今後の家熙、そして公家の茶道研究の基盤を成すものと言っても過言ではないだろう。最後に、川崎佐知子氏は、本書刊行後も、精力的にご論考を発表されている。本誌前号掲載のご論考、「陽明文庫蔵『一乗院宮御茶湯』をめぐる

て——修練時代の近衛家熙茶会記——」〔論究日本文学〕一〇二号 二〇一五年五月)では、貞享三(一六八六)年、一乗院門跡真敬親王(一六四九—一七〇四)が亭主の茶会など、計三会の茶会の記録が記された他会記『一乗院宮御茶湯』について、その記主を当時二十歳であった家熙と規定され、「修練時代」の家熙の茶の湯の一端を明らかにされている。本書と合わせ、底知れぬ家熙研究に欠かせぬ論となっている。

(思文閣出版、二〇一四年六月、本体五〇九、索引七七頁、一五〇〇〇円+税)

(ほんだ・じゅんこ 本学研究生)